

第38回

和漢医薬学会 学術大会

要旨集

現代医療への漢方の応用：
そのサイエンスとアート

会期

2021年

9月4^土日~5^日日

開催形式

Web開催

大会長

元雄 良治

医療法人社団愛康会

小松ソフィア病院 腫瘍内科部長

金沢医科大学名誉教授

田七、杜仲を含む漢方養生食品の認知機能に対する効果の予備検討

○謝 心範¹、山本 理²、原田 雅義³

¹武蔵野学院大学大学院、²漢方養生研究所、³東明会原田病院

【目的】我々は肝機能の保護が脳の活動に大きく影響するという古くからの報告に注目し、漢方養生食品の認知症予防や治療につながる可能性を検討している。これまでに田七、杜仲を含む肝機能改善効果のある漢方養生食品が、ニューロフィラメントの発現、及び神経細胞の神経突起の伸長を含む神経細胞の分化・成長に有意な効果を有したことを報告した。今回の検討では、予備的な試験として、肝機能改善効果のある漢方養生食品養脳力(BW)を健常ボランティアが8週間摂食し、アミロイドβの血中濃度や、アミロイドβの排出に関わる蛋白質の血中濃度変化を観察した。

【方法】男女3人の被験者が漢方養生食品BWをそれぞれ1日あたり1gを2名、1日あたり3gを1名が8週間毎日摂食し、摂食前、4週後、8週後に採血した。各採血時には、一般的な血液生化学検査に加え、血漿中のアミロイドβペプチド(Aβ₁₋₄₂、Aβ₁₋₄₀)の濃度、血清中のアミロイドβ排出関連蛋白(アポリポ蛋白質(ApoA1)、補体第3成分(C3)及びトランスサイレチン(TTR))を測定し、それぞれ濃度変化を観察した。

【結果】肝機能の指標であるAST、ALTは、高用量を摂食していた一例(1日あたり3g)において4週後にそれぞれ42から20 IU/Lへ52%、42から26 IU/Lへ43%と大きく減少した。低用量を摂食していた二例(1日あたり1g)では、4週間、8週間摂食後には、ほぼ変化が無く低値で安定していたことから、本来の肝、腎機能改善、維持を目的とした漢方養生食品の効果が4週間で顕著に表れたことが確認できた。また、BWの摂食により、少なくとも8週間はアミロイドβの血中濃度を変化させないことがわかった。アミロイドβ排出関連蛋白のApoA1及びTTRは増加傾向であった。腎機能の指標であるeGFR、BUNには大きな変化は無かった。

【考察】BWの摂食により、認知機能指標であるアミロイドβとアミロイドβ排出関連蛋白の濃度変化を観察し、肝機能の改善、及び認知機能の悪化防止の可能性が示唆された。今後は被験者を増やし、BW摂食後の認知機能テストも併せて行うなどの更に詳細な検討が必要である。